

戦争立法と憲法9条

写真は昨日紹介した中日新聞4月26日「辺野古基地関連公文書」掲載のものである。

写真には「沖縄・嘉手納基地に駐機する米戦略爆撃機B52。1960年代の辺野古基地計画は、ベトナム戦争中の米軍が沖縄の戦略的重要性を高める中で浮上した＝1967年」とある。



1967年という、大学入学の年である。今とは違って、大学のキャンパスには多くの立て看板が並んでいた。

写真にあるようなB52戦略爆撃機が沖縄からベトナムに飛び立つのを知り、怒りを感じたものだ。その後、信州松本の街中を「ベトナム戦争反対」「沖縄を返せ」と、デモ行進に加わるようになった。

「平和」という名をつけた戦争立法が自公で最終合意された。これから国会でやっと議論が始まることになるが、なんとも言えない怖さを感じる。前からレポートしようと考えていた朝日新聞5月1日「天声人語」を思い出し、全文を書き写して紹介しよう。

終戦間もない1949年、日本を「太平洋のスイスに」と語った人がいる。ほかならぬ占領軍のトップ、マッカーサー元帥だ。英紙監査役とのインタビューで「米国は日本が戦うことは欲しない。日本の役割は太平洋のスイスとなることです」と述べた。しかし翌年には、自衛隊の前身の警察予備隊が発足する。51年には「逆コース」という言葉が流行語になった。冷戦を背景に、なし崩し的に進む再軍備などを指し、「この道はいつか来た道」の意味が込められた。

そうして締結された日米安保は、深化の一途をたどる。80年、大平首相は日米の関係を「同盟国」という言葉で公に表した。レーガン大統領との親密さが際だった中曽根首相は「運命共同体」と言った。そしていま、「地球規模の連携」である。つまり自衛隊の対米支援活動が世界中に広がる。慌ただしく与党内でまとめた安保法制を手土産に、安倍首相は訪米。「大改革を夏までに成就させる」と米議会の演説で約束をした。戻れぬ川を渡った感は強い。

手厚いもてなしは、むろん米側の計算づくだ。関心は実利だろう。日本の首相として初の米議会上下両院合同会議での演説も、オバマ大統領の満面の笑みも、いずれ高くつく請求書に見えなくもない。きのうはベトナム戦争の終結から40年だった。米軍基地はあったものの、日本が直接戦争に加わらずにすんだのは憲法9条の存在が大きい。自衛隊が「普通の軍隊」だったらどうだったかと、ふと試してみる。

(2015年5月13日)